

《中学生の部》

佳作（警察庁交通局長賞）

神奈川県川崎市立中野島中学校

3年 吉田 爽帆

合言葉は「左右オーライ」

「これを見ると元気がわくのよ。」と言う母の視線の先には、母を元気づけようと歌って踊っている幼い私たち姉妹と足がギブスで固定された母の姿がありました。母がバイクを運転中に事故にあい、手術した時のことです。「消防署の前で事故にあったから、救急車を呼ばなくても来たのよ。」と笑って話す母の足元をふと見ると、その時の傷が今でも痛々しく残っていて、胸が締めつけられます。傷の部分を机にぶつけた時にはとても痛がり、「他の所より痛みを感じやすいの。」と顔をしかめる母を見て、私もさすってあげたものでした。

小学六年生の時、私も自転車事故にあいました。横断歩道を青信号で渡っていた際、信号無視をしてきた自転車とぶつかりました。けがは大したことなく、不幸中の幸いでしたが、自転車の前輪が曲がってしまい、動かなくなりました。あっという間に自転車が壊れてしまう衝撃に、とても怖く感じました。交通事故はニュースの中の出来事だと思っていたのに、自分も当事者となり、あぜんとなりました。思い返してみると、警察署の前にある交通事故数を表す表示板にも毎日数件起きていることが示されていました。自分もまたいつか被害者、もしかしたら加害者にもなってしまうかもしれないと思い、ぞっとしました。

私と母の事故の体験から、交通ルールを守っているだけでは事故は防げないとわかりました。私の事故は、青信号だったので、左右の確認をよくしなかったことも要因の一つだと思います。小学校の時の交通安全教室で、青信号になってもすぐに渡らず、左右の確認をすることが大切という教えがあったことの意味を痛感しました。母が運転する車に父が助手席で同乗していると、交差点でよく、「左オーライ」と言います。どうせ母も確認するからむだなと思ったのですが、「お母さんからは見えない部分があるし、たくさんの目で見た方が安全だからね。」と父は満足気に話しました。運転席からは見えない死角があることを知り、私も「死角減らし大作戦」を決行することにしました。車に同乗する時は、交差点や発進する際、私も一緒に安全確認をし、「左オーライ」や、「自転車がきているよ。」などと、母に伝えます。やっていくうちに、なんだか私も運転手になった気分で、視野が広くなり、今まで気にならなかったことが気になるようになりました。自転車が後ろを確認せずに急に横断してくること、道路に駐車している車の前から人が飛び出すこと、バイクが車の横をすり抜けることなど、気を配っていても見逃しそうなことがたくさんありま

した。「運転は片足しか使わないから体は楽だけど、神経は疲れるのよ。」と話す母の気持ちが少しだけわかりました。

一番大切なことは、左右の確認。自分が歩行者の時はもちろん、同乗している時も一緒に確認します。合言葉は「左右オーライ」。左右の安全確認をし、警察署前の表示板に交通事故数ゼロが並びますように。